



派遣したワンボックスカー



田代亮太、伊東俊恵、鈴木義隆

# 板橋中央総合病院チーム、 東京都医療救護班 派遣第5陣に参加！

この度の東日本大震災により、被災された皆様方に心よりお見舞い申し上げます。

**3月11日午後2時46分に発生した巨大地震とそれに続く大津波は、東北地方太平洋沿岸に甚大な被害をもたらしました。様々な救援の手がさしのべられていますが、今なお続いているのが、全国からの医療支援チームの活動です。**

板橋中央総合病院にも、被災直後から行われていた東京都の「医療救護班」派遣の第5陣への参加要請があり、これにこたえて支援チームを結成、被災地へ派遣しました。派遣地域は右手県陸前高田市。期間は

3月26日(土)～29日(火)。移動手段は当院のワンボックスカー。これはそのレポートです。

## 息を呑む…想像以上の被災地

派遣要請のあったのが3月24日。出発までの短時間に救急部・副院長の鈴木義隆先生、看護部の伊東俊恵さん、医事課副主任の田代亮太さんの3人を選出、同時に「診療所1軒分」相当の多数の医薬品・医療器具を積み込みました。

3月26日早朝、病院前を出発。すでに東北自動車道が全面開通していたこともあり、ほぼ通常時間で現地に到着。その日は

若手県庁で現地状況のレクチャーを受け、翌日から陸前高田市に入りましたが、被災地の惨状は息をのむほどの有様でした。仕事の割り振りといったものはまったくなく、目の前の仕事に忙殺されて、他に目が届かない状態でした。

## 被災地には「医の原点」があった！

そこで、私たちは避難所を訪れ、独自に医療支援に当たりました。自ら課題を見し、解決する「この姿勢のある限り、被災地の医療ニーズは無限でした。」



仮設の診察室

意外なことに、現地には「医薬品は山のよう」にあり、何でもそろっていました。しかし、山積みの医薬品は整理されておらず、必要な人に必要な薬が届かない、という状況。早速、仕分けを提案し、それ以後、医薬品の流れはスムーズになりました。

こうした普段なら当たり前のことが、多忙と疲労のために様々なところで見過ごされてきました。震災発生以来すでに2週間が経ち、今は感染症や生活習慣病などの持病への対策が必要な時期です。特に感染症対策は、普段の衛生環境なら簡単に解決

できるのに、被災直後の緊張感のままのせいか「普段の感覚をどこかに置き忘れていた」ようでした。ひと言のアドバイスで、「あ、そうですね」と苦笑しながら直ぐに対応し、どんどん改善されていきました。

被災地の患者さんは、被災の体験をよくお話されます。相つちを打ちながら聞くのが仕事の大半でした。患者さんに寄り添うことで、喜ばれ感謝される、そんな心の交流を実感しました。安心と感謝の気持ちの患者さんと、期待と信頼にこたえる医師。医の原点を見る思いでした。

(救急部副院長・鈴木義隆談)

## 知識と経験が交錯した4日間

災害時の勉強はしましたが、実際の経験はなく、現場の光景に圧倒され、自分の知識がどこまで役立つかわからなかった。ビツクリしたのは、被災された方が津波の中をどう逃げたか、電気がない日々をどう過ごしたかなど、明るく笑いながら話されていたことです。でもこれは「話を聞いてもらって心を浄化するディフューズング(振り返り)という行為」という習ったことを確認するなど、貴重な経験をした4日間でした。

(看護部・伊東俊恵談)

## もっと現地にいたかった…

事務職の私は、チームのなかではロジスティックというポジションでした。病院にも先例がないし、何をしたらいいのか不安なままの出発でした。現地では、情報の収集、資材やガソリンの調達、他の支援チームとの連絡・調整…雑用はすべて引き受け、がむしゃらに動き回った日々でした。帰路もずっと現地にいたかった、という思いと、いつか復興したらもう一度訪ねてみよう、という思いにかられました。

(医事課副主任・田代亮太談)



医薬品は届いていたが、仕分けされていなかった



診察を待つ方々



跡形もなくなってしまった被災地の陸前高田市



医療法人社団 明芳会 板橋中央総合病院

〒174-0051 東京都板橋区小豆沢2-12-7 Tel.03-3967-1181 <http://www.ims.gr.jp/itabashi.hp/>